

# お姉ちゃんといわれて

小川未明

青空文庫



光子<sup>みつこ</sup>さんが、学校<sup>がっこう</sup>へいこうとすると、近所<sup>きんじよ</sup>のおばあさんが、赤<sup>あか</sup>ちゃんをおぶつて、日<sup>ひ</sup>の当<sup>あ</sup>たる道<sup>みち</sup>の上<sup>うえ</sup>に立<sup>た</sup>つていました。

「お姉<sup>ねえ</sup>ちゃん、いまいらつしやるの。」と、おばあさんは、声<sup>こえ</sup>をかけた。

光子<sup>みつこ</sup>さんは、にっこりとしたが、そのまま下<sup>した</sup>を向<sup>む</sup>いて、だまつていってしまいました。

「わたし、お姉<sup>ねえ</sup>ちゃんでないわ。」と、光子<sup>みつこ</sup>さんは、つぶやきました。

あんなにたのんでも、赤<sup>あか</sup>ちゃんを、だっこさしてくれないのに、なんでお姉<sup>ねえ</sup>ちゃんと、いうのだろう。私<sup>わたし</sup>は、お姉<sup>ねえ</sup>ちゃんといわれ

でも、ちつともうれしいことはないわと、光子さんは、道を歩きながら、思いました。

そして、おばあさんが、いじわるのような気がして、ていねい  
にあいさつする気にもなれなかつたけれども、赤ちゃんは、かわ  
いらしくて、ほんとうに、あのほおずきのような、ほおをぶつと  
吹いてやりたくなつたのでした。

「どうして、私に、赤ちゃんをだっこさしてくれないのでしよ  
う。」

ある日、おばあさんは、光子さんのお母さんに向かつて、

「このごろ、お光ちゃんは、なにかお気にさわつたことがあると  
みえて、怒つていらつしやるのですよ。いくら考えても、なにが

お氣きにさわったかわかりませんが、どうかお母かあさんから、きいてみてくださいますか。」と、たのみました。

こういわれたので、お母かあさんは、びっくりして、

「まあ、そんなことがあったのですか、それは、なにかおばあさんの、お考かんえちがいで、ありませんか。しかし、あんなおてんばですから、もし失しつ礼れいをしましたら、どうぞごめんくださいまし。」と、おわびなさいました。

「いえ、そんなつもりで、いったのでないのですよ。私わたしに氣きがつきませんから、なにを怒おこっていらっしやるのか、お光みつちゃんに、おききしてもらいたいです。こないだも、お姉ねえちゃんと声こえをかけますと、下したを向むいて、にげて行って、おしまいなさるのです。

きつとなにか怒おこっていらつしやるに、ちがいありません。」と、  
子供こどもの心こころがわからぬまま、おばあさんは、母は親おやにきいてもらう  
よう、笑わらいながらたのんだのでした。

「まあ、そんなまねを、光みつこ子こがしたのでございますか。」と、お  
母かあさんは、顔かおを赤あかくして、おばあさんに、きまりのわるい思おもいを  
なさいました。

「いいえ、けつして、お光みつこちゃんをしからんでください。自分じぶんに、  
わけが思おもい出だせないから、おききしたのです。」と、おばあさん  
も、とがめるつもりで、いったのでないと、恐きよう縮しゆくしました。

お母かあさんと、おばあさんの、二人ふたりは、たがいに心こころがわかると、  
へだてなく、笑わらいながら、世せ間けんの話はなしなどして、別わかれたのでした。

お母<sup>かあ</sup>さんは、家<sup>いえ</sup>へ帰<sup>かえ</sup>って、さつそく、光子<sup>みつこ</sup>さんを自分<sup>じぶん</sup>のそばへ呼び<sup>よ</sup>ました。そして、おばあさん<sup>おばあさん</sup>に對<sup>たい</sup>して、どうして、そんな失<sup>し</sup>礼<sup>れい</sup>な態度<sup>たいど</sup>をしたのかと、おききになりました。

光子<sup>みつこ</sup>さんは、しばらく下<sup>した</sup>を向<sup>む</sup>いて、だまっていましたが、

「早く<sup>はや</sup>、おいしいなさい。」と、お母<sup>かあ</sup>さんに、うながされると、あのとき<sup>あのとき</sup>のことを思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>して、つい悲<sup>かな</sup>しくなり、目<sup>め</sup>から涙<sup>なみだ</sup>を落<sup>お</sup>としながら、

「私<sup>わたし</sup>、お姉<sup>ねえ</sup>ちゃんでないんですもの。」と、答<sup>こた</sup>えました。

「赤<sup>あか</sup>ちゃん<sup>ちゃん</sup>から見<sup>み</sup>れば、あなたは、やはりお姉<sup>ねえ</sup>さんでしょう。」と、お母<sup>かあ</sup>さんは、これにはなにか理<sup>りゆう</sup>由<sup>ゆう</sup>があると、察<sup>さつ</sup>せられて、やさしく、いわれました。

「わたし、お姉ちゃんなら、すこしばかり赤ちゃんを、だっこさせてくれたっていいでしょう。それなのに、いくらおばあさんに、おねがいしても、赤ちゃんを抱かしてくれないのですもの。」と、さもうらめしそうに、泣きながら、母親に、訴えたのでした。

お母さんは、光子さんが、赤ちゃんをだっこしたいばかりに、じれているのだとさすると、むしろ、その子供らしい、やさしい心をば、いじらしく思いました。

「ああ、そうだったの。ほんとうに、おまえさんも、赤ちゃんなのね。」と、いつて、笑われました。

その後、このことを、お母さんは、おばあさんに話されたのであります。すると、おばあさんも、急に明るい顔つきとなつて、

「ああ、そうでしたか、私わたしが、わるかったのです。ただあぶないと思おもって、いくたびも光みつちゃんが、抱だかしてくれとおっしやつたのをだかさなくて、わるいことをしました。それで、よくわかりました。こんど、おんぶしてもらいましょうね。」と、いって、おばあさんも目めがしらに、涙なみだをためていられました。

その翌よくじつ日ひでした。おばあさんは、外そとで遊あそんでいた光みつこ子こさんを呼よんで、

「さあ、赤あかちゃんをおんぶしてくださいね。なかなか重おもいから、だっこは無むり理りです。いま、ひもをかけますから、おんぶしてくださいよ。」と、いって、光みつこ子こさんの、小ちいさな背せ中なかへ、赤あかちゃんをおんぶさしてくださいました。

はじめで、赤ちゃんをおぶって、光子さんは大喜びでした。日かげにいては、赤ちゃんが、寒いので、日のよくあたる往來へ出ると、赤ちゃんはうれしがって、おくん、おくんといつて、おどり上がりしました。そのたびに、力があまって、光子さんは、ころびそうになるのを、危うくこらえました。

「まあ、なんて元気のいい、強い赤ちゃんでしょう。」と、光子さんは、うれしかったのです。そして、もし、おばあさんが、ひもでおぶわしてくれなかったら、落としてしまったかもしれぬと思います、そんなことに気がつかなかった、自分のわがままを、はじめで、わるかったと、さとったのです。





## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「博愛 737号」

1951（昭和26）年1月

※表題は底本では、「お姉《ねえ》ちゃんといわれて」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# お姉ちゃんといわれて

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>